

二〇〇八年 安居本講

『顯淨土真仏土文類』 窃以

—— 迷失せる恩徳 ——

鍵主良敬

開講の辞

このたび山命を受けて、『顕浄土真仏土文類』を窃以するに当たり、講題をあえて「迷失せる恩徳」と致しましたのは、「真仮を知らざるに由って」（聖典三三四頁）とある御自釈の曰わんとするところに、「真仏土」解明の眼目があると感じたからであります。「如来広大の恩徳」を迷失していながら、その事にまったく気づいていない私自身に対して、どこか深いところから鋭く問いかけられているような思いに、切なるものがあつたのであります。

ところで、「真仮を知らざるに由って」とは、どのようなことなのでありましょうか。「真」と「真実」は同じなのか、異なるところもあるのか。いずれにしても、「真仏土」の「真」によってこそ、「仮」は仮としての意味づけが明らかになり、「仮」の位置が明白になってこそ、「真」は真としての意味を発揮できるとの祖意なのであるか。そのことが問われたのであります。しかも真仮の「仮」は、化身土の「化」とも関係しています。両者は同じ内容を指し示している。そのような面も確かにあります。しかしまったく同じかとなれば、そうともいえない面もあるように思われます。そこに疑

問が残ります。

つまり、「化」と関係する「仮」の微妙な独自性と差異性が明らかにならなければ、「真」の仏身・仏土の正体を知ることにはできない。まさに仏心の根本である「大悲の恩徳」を、眼前にしながら、それを「迷失する」ことになるとの問いかけなのでありましょうか。その問いのもつ重さに留意することによって、「真仏土巻」に示されているさまざまな課題に、多少とも迫ってみたいと思つた所以であります。

次に『大無量寿経』のいう「自然虚無の身」(聖典三九頁)は、「真仏土巻」に御引用の『涅槃経』では、「虚空の(と)し」(聖典三〇七頁)でありました。それは「虚無」ですから、何も無いこととどのような違うのか。簡単に受けとれませんでした。つまり、それが重要な課題であるといわれても、「無極の体」(聖典三九頁)の広がりや深さにあるものを、了解するなどということは、容易ならざることだったのであります。

ところがその虚空のような虚無が、私の迷失している凡愚の事実をありのままに照らし出す「無碍光」の当体にかかわるものでありました。虚空に包まれるという摂取不捨の関係を、如来そのものから賜うることにおいて、捉えどころのない「虚無之身」を、捉える必要のない「妙有」に転じる可能性の見出されるところでもあります。限らない世界においてあるものが、大悲の願心によって成り立つ

ている「真仏土」の主体であったのであります。その悲願の確かさに頷くことによって、そこへの参入が可能になる。それを成就せしめる願心であるからこそ、「信」が問われることになり、その信を如来より賜うという呼応の関係を成り立たせるところに、真の仏身・仏土がある。そのことが多少納得できたということになります。

そのことに気づかされ、いわばこの汚濁の現実のただ中にありながら「往生」ということが問題になるのは、「虚無之身・無極之体」に触れることによつて、そこに「願生浄土」の道が開かれるからではないか。「難思議往生」が「信巻」と「証巻」の重要な課題でありつつ、「真仏土巻」の結びの御自釈で述べられるのは、「真実の信心」とその「証果」を包んで、「真仏土」が展開していることを示しているように思われたのであります。

だとすれば、そのことが可能になる契機はどのような形で示されているのか。それを明らかにするものが「法蔵菩薩のなおり」を述べる『華嚴経』の「宝王如来の性起の義」(聖典三二四頁)でありました。奇しくも私は、親鸞聖人に値遇できることになる御縁を、恩師山田亮賢先生からいただいた者であります。まさに雲を掴むような途方にくれる出会いでしかなかったのであります。そのところに、「すでに悲願います」(聖典三二六、三四七頁)でありました。

「いろいろもおよばれず。ことばもたえた」(聖典五五四頁)虚無の虚空の中から「法蔵菩薩となおり」

(聖典五四三頁)でて来られた、それが人生の宝であり王でもある如来の「性起の義」であることなど、夢にも思うことのできない御縁の中でのことであります。そこでお遇いできた奇遇としかいいようのない出遇いが、この度取り上げさせていただいた『華嚴經』「性起品」の「奇なる哉」(大正九・六二四a)を地で行く事実だったのであります。

「法性に随順して、法本に乖かず」(『浄土論註』聖典三二四頁)といわれる「性」が、「真実」そのものを内包しつつ、その「必然の義」(同前)において、「法蔵菩薩」の「なのり」になる。「かたちのないもののかたち」となり、かたちになりながら「かたち」を超える。そのはたらきこそ「尽十方無碍光如来」としての名号の呼びかけであることに、ほんの少しではあります。確認させられたことであります。それが、世自在王仏のもとでさとられた法蔵菩薩の「無生法忍」にかかわることであるなどとは、惑染の凡夫にすぎない身で口にするべきことではないことは重々承知しています。しかしはるか久遠の彼方から無関係とはいえないという梵声の響きとして、聞こえないわけではないということは、恐懼して行うことができます。

以上のことは厳しい痛みを通してしか明らかにならないこともまた問題になりました。つまり「信巻」に象徴される能帰の立場が証を通して明白になり、それを成就するための所帰として「真仏土」があるかぎり、真実の信における「機の自覚」が問われることになるからであります。機に呼応する

法としての光明の語って止まないものは、「如来広大の恩徳を迷失」している自らの事実以外にはありませんでした。

その意味では「垢障の凡夫」にすぎない我われが、「小聖」でさえ「階いがたし」(聖典三二〇頁)といわれる、「高妙にして」(同前)かつ甚深な課題に、どのようにして「随順」し「得入」(聖典三三三頁)しうるといわれるのか。善導大師の嘆きとその質を同じくしながら、歩をより一歩進めて諸文を御引用になるのが、宗祖の痛みであったのではないのでしょうか。

求めるべきものであり、願うべきものであるにもかかわらず、「実に欣趣しがたし」(聖典三二〇頁)となつて、どのような言葉でもいい表わすことのできないような事実の確認を迫られたのであります。「正しく仏願に託する」(同前)しかないとの引文が、強烈に響いてきたことであります。「大悲の願心」の酬報としての「真仏土」が、遠く彼方でありつつ、「此を去りたまふこと遠からず」(聖典九四頁)として「果遂の誓い」まで含めて、「光明無量の願」に集約された一刹那でありました。

宗祖が「ただ仏恩の深きことを念じて、人倫の嘲を恥じず」(聖典四〇〇頁)とまでいい切られたのは、「如来大悲の恩徳」(聖典五〇五頁)のもつ根源的な光の暖かさに触れることのできた、感動の表白だったのではないのでしょうか。

今夏、この安居に御参集くださった同学の諸士とともに、宗祖聖人の御恩徳の万分の一でも「敬

信「し」奉持」できれば、幸いであると思つているところであります。

二〇〇八年七月十五日

鍵主良敬

目次

開講の辞

序章 真仏土卷の位置と課題	1
第一章 真と仮の概要	10
第一節 真と仮と偽	10
第二節 真と仮	15
第三節 実と仮	22
第二章 『涅槃経』の問うもの	27
——虚空のごとし——	
第一節 虚無の身——「四相品」——	27

第二節	光明と仏性——「四依品」「聖行品」——	35
第三節	道と大楽——「梵行品」「徳王品」——	41
第四節	仏性は未来——「迦葉品」——	49
第二章	無碍光如来の性起の義	54
第一節	如来の勝過と大慈悲	54
第二節	性と性起	59
第三節	宝王如来性起品の要旨	64
第四節	積習する性と無生法忍	69
第五節	修起する浄土	77
第四章	有と無を離る	85
第一節	不可思議の願力成就	85
第二節	十二光の超越性	93
第三節	『往生要集』の非有非無観	107
第五章	如来の真説・宗師の釈義	115
第一節	報身如来の性空と逍遙	115
第二節	少分仏性と随順・得入	134
結章	恩徳の深層	148

序章 真仏土巻の位置と課題

「浄土真宗」を「大乘のなかの至極」（『末燈鈔』・聖典六〇一頁）と了解された親鸞聖人は、『顕浄土真仏土文類』（以下「真仏土巻」）をお示しになるに当たっても、往相・還相の二回向、教・行・信・証の四法を踏まえておられる。二回向・四法の基盤としての位置づけをこの「真仏土巻」に明らかにしながら、「化身土巻」への展開を目指されているのである。

このような『顕浄土真実教行証文類』（以下『教行信証』）六巻の展開を思うとき、宗祖が一貫して因果に注目なさっておられることが注意される。すなわち、真実の教のもとに歩まれる真実の行・信・証のそれぞれについて、「真仏土」との関係がうかがわれるのである。

まずその一例を「行巻」に見ると、

良に知りぬ。徳号の慈父ましますは能生の因闕けなん。光明の悲母ましますは所生の縁垂きなん。能所の因縁、和合すべしといえども、信心の業識にあらずは光明土に到ることなし。真実の業識、これすなわち内因とす。光明名の父母、これすなわち外縁とす。内外の因縁和合して、

凡例

- 一、出典については、以下のように略記した。
- | | | |
|-----------|---|-----|
| 『真宗聖典』 | ↓ | 聖典 |
| 『真宗聖教全書』 | ↓ | 真聖全 |
| 『大正新脩大藏経』 | ↓ | 大正 |
- 一、漢字は、原則として常用漢字を使用した。

報土の真身を得証す。

(聖典一九〇頁)

名号と信心を内外の因縁として、「報土」すなわち「真仏土」の「真身を得証す」と述べられている。そしてこの名号については、

「阿弥陀仏」と言うは、すなわちこれ、その行なり。この義をもつてのゆえに、必ず往生を得、と。

(聖典一七六頁)

とある「玄義分」の文について、『尊号真像銘文』で、

「言阿弥陀仏者」ともうすは、「即是其行」となり。即是其行は、これすなわち法蔵菩薩の選択本願なりとしるべしとなり。安養浄土の正定の業因なりとのたまえるころなり。

(聖典五二二頁)

と述べられているように、「行」とは、「法蔵菩薩の選択本願」であり、「安養浄土」つまり「真仏土」の「正定の業因」なのである。

次に「信巻」でいえば、

涅槃の真因はただ信心をもつてす。

(聖典二二三頁)

を初めとして、

この心はすなわち如来の大悲心なるがゆえに、必ず報土の正定の因と成る。

(聖典二二八頁)

等、枚挙にいとまがない。「真実の信心」が「真実報土」の因である。

至心信樂欲生と

十方諸有をすすめてぞ

不思議の誓願あらわして

真実報土の因とする

(聖典四八四頁)

という『浄土和讃』大経意のいう通りである。

また「証巻」でいえば、

すなわちこれ必至滅度の願より出でたり。また証大涅槃の願と名づくるなり。しかるに煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相回向の心行を獲れば、即の時に大乘正定聚の数に入るなり。正定聚に往するがゆえに、必ず滅度に至る。

(聖典二八〇頁)

で明らかである。滅度が「真仏土」であることはいままでもない。ここでは特に正定聚に住することが問われているが、「証」の内容をさとり、菩提とすれば、「大涅槃」と「大菩提」との関係も興味深い。このように四法について因と果の關係に關心が向くのである。そしてそれはいまでもなく二回向の成就においてあるのである。

因と果の關係に私がいま注目するのは、宗祖聖人が注目しているというわけではないが、源信僧都

に次のような示唆があるからである。

応に知るべし、仏を念じ、善を修するを業因となし、極楽に往生するを花報となし、大菩提を証するを果報となし、衆生を利益するを本懐となすことを。譬へば、世間に、木を植えれば花を開き、花に因りて菓を結び、菓を得て饗受するが如し。

〔往生要集〕・日本思想大系六『源信』一二二頁

また「菩提はこれ果報にして、極楽はこれ花報なり」(同一四〇頁)といういい方もなされている。極楽に往生することは花を開いた段階であり、その花報を前提として、大菩提を証するという結果に至るといふ考え方である。証の位置が改めて問われるということも含めて、「真仏土」を明らかにするということは、花報としての往生極楽ということですむはずがないのである。あくまでも「証大菩提」を果報とするためのその前提となる「真仏土」の問題である。大菩提のための大涅槃ともいえる。「浄土の大菩提心」が明らかになるための報土の建立ともいえよう。

ちなみに、花報と果報の二報については、「信巻」に引用されている『涅槃経』における阿闍世の言葉が参考になる。次のものである。

我今この身にすでに華報を受けたり、地獄の果報、將に近づきて遠からずとす。(聖典二五二頁)

心の悔熱のために遍体に瘡を生じて、その臭穢は近づけないほどであったという状態が華報であり、それは間もなく地獄に落ちるといふのが果報である。要するに因と果の関係を報として見るのであり、善因楽果にも悪因苦果にも通じている。

以上のような因果の関係を念頭に置いて「真仏土巻」を見ると、それが「証巻」の必然的展開であることははつきりする。第十一「必至滅度」の願において目指されている滅度こそ、「真仏土」の主眼である光・寿二無量の願だからである。

『大経』に言わく、設い我仏を得たらんに、光明よく限量ありて、下百千億那由他の諸仏の国を照らさざるに至らば、正覚を取らじ、と。

また願に言わく、設い我仏を得たらんに、寿命よく限量ありて、下百千億那由他の劫に至らば、正覚を取らじ、と。(聖典三〇〇頁)

ところで、無量なるものにかかわることのできる手がかりが、有量でしかない我われのどこにあるというのか。果てしない命として、寿命が無量であるといわれても、それはいったいどういうことなのか。どのような意味で無量寿であるといわれるのか。

また光明無量についても疑問は尽きない。どこまでも照らし出すということも、単なる具象的あり方だけでなく、人間の心の奥底までであるとなればなおさらである。しかも光明と寿命とは二でありながら一であり、その逆でもあるといわれる。その寿命と光明とを大地とするので、「真仏土」は

「無量光明土」であり、「光明は、智慧のかたち」（『唯信鈔文意』・聖典五五四頁）なので、「諸智土」（聖典三三三頁）でもあるとなっている。それはどういうことなのであろうか。

端的にいつて、「ひかりの大地」ともいえるその大地を建立して、そこに一切衆生を摂め取り、しかもその「いのち」の依り処となろうとする。その「誓願」とはいったい何ものなのであろうか。またそのような誓願の対象となっている「衆生」にはどのような問題があるから、必然的にそうなるという構造になっているのであろうか。

以上のような問いに対して宗祖は、「真仏土巻」の御自釈を次のように述べることによって始められている。

謹んで真仏土を案ずれば、仏はすなわちこれ不可思議光如来なり、土はまたこれ無量光明土なり。しかればすなわち大悲の誓願に酬報するがゆえに、真の報仏土と曰うなり。すでにして願います、すなわち光明・寿命の願これなり。

（聖典三〇〇頁）

「光明」と「寿命」といえば、主体としての「仏」もしくは「如来」等の一面あるいは属性と考えるのが一般的かもしれない。ところが宗祖においては「如来」が主語ではなく、「光如来」が中心だと了解されているのである。つまり如来は単に如来ではなく、光そのものが如来であるとする驚くべき発想である。そのような仏もしくは如来が、「真仏土」の主体であるということで「仏は

すなわちこれ不可思議光如来なり」というのであろう。

『尊号真像銘文』の次の所説が参考になる。

尽十方無碍光如来ともうすは、すなわち阿弥陀如来なり。この如来は光明なり。尽十方というは、尽はつくすという、ことごとくという。十方世界をつくして、ことごとくみちたまえるなり。無碍というは、さわることなしとなり。さわることなしともうすは、衆生の煩惱悪業にさえられざるなり。光如来ともうすは、阿弥陀仏なり。この如来はすなわち不可思議光仏ともうす。この如来は智慧のかたちなり。十方微塵刹土にみちたまえるなりとしるべしとなり。 （聖典五一八頁）

この「不可思議」は、

自利利他円満して

帰命方便巧莊嚴

このころもことばもたえれば

不可思議尊を帰命せよ

（聖典四八二頁）

と讃ぜられる『浄土和讃』の「不可思議尊」に当たるであろう。単に思い議ることが不可能であるというよりも、「このころもことばもたえ」はてた「法身は、いろもなし、かたちもましまさず。しかれば、このころもおよばず。ことばもたえたり」（『唯信鈔文意』・聖典五五四頁）と呼応している。しかもそ